

# 藤丸遺跡Ⅳ

—集合住宅建設工事に伴う発掘調査—



平成26年 3月

彦根市教育委員会






## 例 言

1. 本書は、彦根市教育委員会が、集合住宅建設工事に伴い、平成24年4月25日から平成24年6月22日にかけて実施した、藤丸遺跡の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。整理調査については、平成25年4月24日から平成26年3月にかけて行った。
2. 本調査の調査地は、彦根市高宮町字六ノ町902番1、903番1に位置する。
3. 本調査は、彦根市教育委員会文化財部文化財課が実施した。調査の現体制は下記のとおりである。

教育長：前川 恒廣  
文化財部長：入江明生                      文化財部次長（兼文化財課長）：西田哲雄  
課長補佐：久保達彦  
史跡整備係長：北川恭子                      文化財係長：木戸洋平  
主 査：深谷 覚                                  主 査：池田隼人  
副主査：三尾次郎                              主 任：森下雅子  
主 任：林 昭男                                  主 任：戸塚洋輔  
主 任：下高大輔                              技 師：田中良輔  
臨時職員：佃 昌幸
4. 現地調査・整理調査は戸塚が担当し、以下の諸氏が参加した。

現地調査：赤田 隆 阿部修平 池田 寿 岡田ひとみ 左近健一朗 高橋時子  
野村惣三郎 森谷義男 森 義信 森 和代 吉田輝一 上田定男（作業員）  
久保亮二（調査補助員） 大西 遼 北森 光（滋賀県立大学学生）  
整理調査：佃 昌幸（臨時職員） 岡田ひとみ 高橋時子（作業員）  
大西 遼 北森 光 荘林 純（滋賀県立大学学生）
5. 本書で使用した遺構実測図は、久保亮二、佃 昌幸、大西 遼、北森 光が作成し、遺物実測図については、佃 昌幸、大西 遼、北森 光が作成した。遺構と遺物の写真撮影は、調査担当者が行った。
6. 本書の執筆及び編集は、戸塚洋輔が行った。
7. 本書で使用した方位は、平面直角座標第Ⅳ系の真北に、高さは東京湾平均海面に基づく。
8. 本調査で出土した遺物や写真・図面等は彦根市教育委員会で保管している。
9. 本書で報告する土器の断面と種類の関係は、以下のとおりである。

土師器  須恵器  陶器 

# 目次

---

例言

## 第1章 序論

- 1 調査の経緯と経過 ————— 1
- 2 地理的・歴史的環境 ————— 1

## 第2章 調査成果

- 1 基本層位 ————— 6
- 2 遺構と遺物 ————— 6

## 第3章 まとめ ————— 17

図版

報告書抄録

---

# 第1章 序 論

## 1 調査の経緯と経過

藤丸遺跡は彦根市高宮町・大堀町に位置し、本発掘調査としては今回の調査が4次調査となる。4次調査区は、高宮町字六ノ町902番1、903番1に位置する。藤丸遺跡は、芹川と犬上川によって形成された複合扇状地の扇中央部に位置し、扇状地末端部の湧水地点より標高が高く、標高105～108mとなっている。約300m西方には、東山道が縦貫している。一帯は近年になって開発が進んできた地域であり、周辺には水田や畑がまだ多く残っている。3次調査地点も水田として土地利用が行われていた。

今回の緊急発掘調査は、集合住宅建設工事に先立ち提出された文化財保護法第93条の届出及び調査依頼にもとづくものである。平成24年2月14、15日に開発面積2,123㎡を対象として、遺構の有無を確認するために試掘トレンチ10箇所を設定して試掘調査を行った。その結果、トレンチ7箇所では遺構を確認するにおよび、開発に先立ち発掘調査を実施する必要性が指摘された。したがって、協議を経て、工事のために遺構の現状保存が不可能な集合住宅建築部分を対象として本発掘調査を実施した。

発掘調査は平成24年4月25日に着手し、平成24年6月22日に終了した。調査面積は436㎡である。表土を重機（バックホー）により除去した後、人力により遺構の検出・掘削を行った。遺構平面図の作成は、グリッドを基準に縮尺20分の1を基本に、適宜縮尺10分の1で人力によって行った。その後、平成25年4月24日～平成26年3月にかけて整理作業を行い、本報告書の刊行となった。

## 2 地理的・歴史的環境

### (1) 地理的環境

藤丸遺跡は、彦根市高宮町・大堀町に所在する古墳時代から古代の遺跡である。鈴鹿山系から流れる芹川・犬上川に挟まれた標高105～108mの微高地上に立地する。藤丸遺跡の北方には、鞍掛山と亀甲山が芹川の両岸に位置し、芹川右岸の平地をはさんで霊仙山系の末端の丘陵が東方から正法寺町付近にのびている。藤丸遺跡の東方、南方は、平地が広がり徐々に標高を高めつつ多賀大社、敏満寺付近の青竜山の丘陵へ至る。犬上川の左岸と右岸には、多賀町榑崎付近を扇頂とする犬上川扇状地が広がる。西方には、芹川下流の雨壺山丘陵があり、琵琶湖岸まで沖積平野が広がっている。このように藤丸遺跡は、犬上川・芹川の複合扇状地上に位置し、犬上川扇状地の扇端にある湧水地よりも標高の高い土地に位置する。

### (2) 歴史的環境

**縄文時代** 芹川の扇状地では、縄文時代晩期から遺跡が確認され、大岡遺跡では縄文時代晩期から弥生時代前期の土器が出土し、久徳遺跡では縄文時代晩期の土器棺墓が検出されている。土田遺跡では、土器棺墓からなる後期・晩期の墓域が検出されている。また、



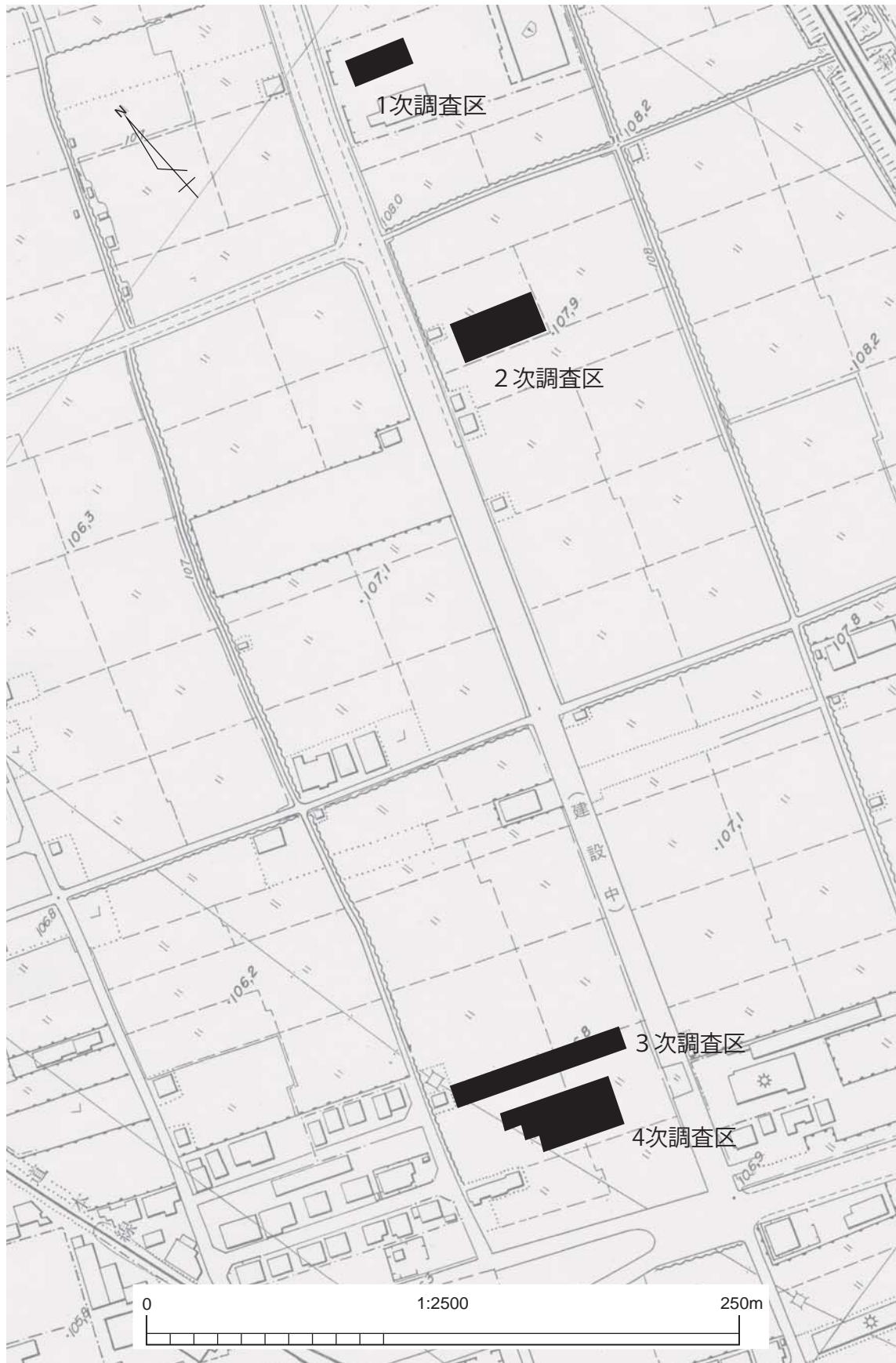


図2 調査区の位置

犬上川流域で最も古い遺物は、福満遺跡から出土した縄文時代前期末の大歳山式土器である。福満遺跡は、犬上川流域のなかでも琵琶湖に近い水の豊富な沖積地の微高地上に位置し、縄文時代中期の様相は不明瞭であるが、後期から晩期にかけて集落が展開する。福満遺跡の東に位置する丁田遺跡では、竪穴建物と埋設土器が検出され、中期末の集落の存在が明らかとなった。墓の可能性のある埋設土器の中からは、翡翠大珠が出土している。縄文時代の稀少な装身具である翡翠大珠は、北陸地方から流通したものと考えられ、湖東地域と北陸地方との関係や湖東地域の縄文社会を考えるうえで重要な遺物である。

**弥生時代** 弥生時代前期・中期の遺跡の様相をみると、犬上川右岸の竹ヶ鼻廃寺遺跡において弥生時代前期の土器が出土し、芹川流域の下沢遺跡では弥生時代前期の土器棺墓が検出されている。一方、犬上川左岸の荒神山麓では、稲里遺跡で弥生時代前期の集落が、妙楽寺遺跡では弥生時代前期末～中期前半の集落が調査されている。川瀬馬場遺跡では、弥生時代中期中葉から後半の集落が調査されている。これらの遺跡は、扇状地の扇端より下流の氾濫平野など低湿地に位置している。

**弥生・古墳移行期** 犬上川右岸の福満遺跡、品井戸遺跡と左岸の堀南遺跡が知られ、その多くは、扇状地より湖岸側に位置する。福満遺跡では、集落と方形周溝墓域が検出され、品井戸遺跡と堀南遺跡においても、同様に方形周溝墓域が検出されている。福満遺跡では、北陸系土器、S字状口縁台付甕を含む庄内式併行期の土器が出土し、北陸地方や濃尾平野とも強い関係をもっていたことが想定される。芹川流域では、沖積地に位置する下沢遺跡で方形周溝墓が検出されている。芹川の扇状地の扇央部に位置する木曾遺跡では、庄内式併行期から布留式期の集落が営まれ、布留式期の竪穴建物からは、珠文鏡の破鏡が出土している。

**古墳時代** 古墳時代になると、前期末には、琵琶湖岸に近い荒神山丘陵の稜線上に荒神山古墳が築かれる。全長124mの前方後円墳で、大津市膳所茶白山古墳とほぼ同形・同大である。膳所茶白山古墳とともに、琵琶湖における水運を担った有力な被葬者が埋葬されたのであろう。古墳時代後期には、同じ荒神山丘陵に横穴式石室を埋葬施設とする荒神山古墳群が築かれる。現在、30基以上の古墳が確認されている。荒神山王谷1号墳の横穴式石室の玄室は、やや寸詰まりのプランで、持ち送り技法によって構築され、天井石は一石である。ドーム状を呈し、渡来系氏族との関わりが強い。福満遺跡では、円圏文をもつ子持勾玉が出土しており、こうした子持勾玉は日本海側や韓半島においても出土していることから、韓半島と日本列島との交流を示す遺物として注目できる。これらの横穴式石室や子持勾玉からは、犬上川流域において渡来系氏族が定着した様子がうかがわれる。福満遺跡の付近には、「椿塚」という藪があり、石室が発見されて須恵器が出土したと伝わり、古墳が存在した可能性が高い。芹川流域の木曾遺跡においても、渡来系氏族との関連が推定される古墳時代後期の大壁造建物が検出されている。また、芹川流域では鞍掛山遺跡、正法寺古墳群において中期・後期古墳が構築されている一方、琵琶湖岸の松原内湖遺跡では、須恵器と耳環を副葬した古墳時代後期の土壙墓が確認され、その東に南北に伸びる佐和山丘陵においても後期古墳である磯山の諸古墳、埋塚古墳、千代神社裏山古墳が確認されている。



奈良・平安時代 犬上川流域の白鳳寺院としては、高宮廃寺、竹ヶ鼻廃寺、八坂廃寺が知られる。藤丸遺跡の西方に位置する高宮廃寺では、高宮町小字「遊行塚」に塚状の高まりがあり、それが鎌倉時代の遊行上人が建治3年（1277）に巡錫回向した遊行塚であったと伝わる。礎石もみつまっているが、塚状の高まりとともに現存しない。白鳳時代の瓦も出土し、古代寺院であったと考えられている。また、藤丸遺跡の北東に位置する鳥籠山遺跡では、瓦と須恵器をともに焼成した窯跡が検出されている。藤丸遺跡周辺では犬上郡の下部単位である高宮郷が、大堀町付近には駅家郷が存在していたことが推定されている。壬申の乱（672年）の古戦場である鳥籠山は、藤丸遺跡の北方の鞍掛山に比定され、その周辺は東山道鳥籠駅に比定されている。東山道は鞍掛山と亀甲山との間を通り、東山道はこの付近から、鳥籠駅の前駅である清水駅の比定地である東近江市清水鼻付近へのびており、その間の甲良町尼子西遺跡では実際に道路遺構が検出されている。藤丸遺跡の西方では、東山道は竹ヶ鼻廃寺遺跡の南東に位置し、竹ヶ鼻廃寺遺跡では白鳳時代から奈良時代の瓦が出土し、白鳳時代以降の寺院跡と考えられている。奈良・平安時代になると、品井戸遺跡、竹ヶ鼻廃寺遺跡、福満遺跡、丁田遺跡、藤丸遺跡、法士南遺跡では、掘立柱建物と竪穴建物からなる集落が営まれるが、竹ヶ鼻廃寺遺跡では、奈良時代後半に寺院を廃して大型の掘立柱建物群や柵が設置されており、円面硯や銅匙も出土し、犬上郡衙の有力な比定地とされている。東側に位置する品井戸遺跡では石帯が出土し、竹ヶ鼻廃寺遺跡と品井戸遺跡は、古代の犬上郡において中心的な位置を占めていたものと考えられる。

#### 鎌倉・室町・戦国時代

東山道から多賀大社へのびる「多賀道」が分岐する高宮の集落では、集落中心部の東寄りにある高宮小学校・高宮幼稚園に高宮城跡が存在した。高宮城跡は、鎌倉時代から戦国時代に当地を支配した高宮氏の居城で、発掘調査によって堀状の遺構が検出されている。高宮の北方の大堀にも大堀城跡の存在が推定されているが、詳細な点は不明である。

#### （3）藤丸遺跡の調査概要

1次調査では奈良時代と推定される竪穴建物3棟や古墳時代前期の土器、奈良時代の土師器、須恵器が検出された。2次調査では、奈良時代と推定される掘立柱建物5棟、柵1条が、3次調査では、奈良時代の竪穴建物1軒、掘立柱建物2棟が検出された。藤丸遺跡は奈良時代を主体とする集落遺跡で、周辺の旧地形としては、低地と微高地が複雑に織り成す変化に富んだ地形であったことが知られる。集落は、点在する微高地上に存在する可能性が高い。

表1 藤丸遺跡における発掘調査

調査番号	調査時期	調査主体	主な時代	文献
1次	1993年10月～1993年12月	彦根市教育委員会	古墳前期・奈良	1
2次	2004年12月	彦根市教育委員会	奈良	1
3次	2011年10月～2011年12月	彦根市教育委員会	奈良・平安	2
4次	2012年4月～2012年6月	彦根市教育委員会	奈良	本書

#### 文 献

- 彦根市教育委員会 2005『藤丸遺跡Ⅱ』彦根市埋蔵文化財調査報告書第37集
- 彦根市教育委員会 2013『藤丸遺跡Ⅲ』彦根市埋蔵文化財調査報告書第53集

## 第2章 調査成果

### 1 基本層位

藤丸遺跡における基本層位としては、1～3層に分類できる。1層は、灰色粘質土で、近現代の水田耕作土である。2層は、これに伴う黄褐色粘質土の床土である。3層は暗褐色粘質土で、奈良・平安時代の遺物をわずかに含む包含層である。約30cmの厚さで堆積している。3層の下の基盤層は、礫混じりの黄褐色粘質土である。基盤面の標高は、105.2～105.5mである。調査区の東端の基盤層には礫が多く含まれ、遺構は希薄である。

遺構検出は、基盤層の上面において行った。遺構の埋土は暗褐色粘質土で、3層の包含層との判別はきわめて難しい。今回の調査では、奈良時代の掘立柱建物10棟、柵3条が検出された他、時期不明の土坑4基を検出した。

### 2 遺構と遺物

#### (1) 掘立柱建物 (図4・5・7・8・9・10・11)

SB01～10の10棟の掘立柱建物跡が検出された。いずれの柱穴からも、遺物は出土していない。遺構の時期を示す遺物は出土していないが、遺構検出面で奈良時代の土師器、須恵器片が出土している点、隣接する3次調査区において奈良時代の掘立柱建物跡、竪穴建物跡が検出されている点を考慮し、これらの掘立柱建物は、奈良時代のものである可能性が高いと判断した。

掘立柱建物跡の規模は、表2に示したとおりである。SB02・03を除き、建物の主軸は、ほぼ正南北である。SB04が最大で、19.7㎡を測る。SB01が推定面積3.9㎡と小型である。その他の建物は、面積約6～9㎡である。また、SB02・05が3間×1間、その他は2間×1間である。全体像が不明なSB06・08についても、2間×1間の構造であると推定される。柱穴の掘方は、円形で、大きなもので径50～60cm程度である。

表2 奈良時代の掘立柱建物

遺構番号	桁間×梁間	規模(m)	面積(㎡)
SB01	2×1	(2.8)×1.4	(3.9)
SB02	3×1	(4.2)×2.0	(8.4)
SB03	2×1	3.12×1.88	5.8
SB04	2×1	5.2×3.8	19.7
SB05	3×1	3.0×2.2	6.6
SB06	—	—	—
SB07	2×1	4.0×2.3	9.2
SB08	—	—	—
SB09	2×1	3.4×2.3	7.8
SB10	2×1	3.3×2.3	7.6

( )は推定値

## (2) 柵 (図11)

SA01～03の3条の柵が検出されている。遺物は出土していない。長さは1.5m程度のものから、3.7m程度のものまである。SA01・02は、掘立柱建物群の中央を分断するかたちで検出された。掘立柱建物跡との位置関係から、奈良時代のものである可能性が高いと考えられる。

## (3) 土坑 (図12)

SX01は、不定形土坑である。3基の土坑が方形にめぐり、それぞれ関連する一体の遺構であると考えられる。土坑の深さは、最大で0.34mである。性格は不明である。遺物も出土しておらず、はっきりした時期は不明である。八反切遺跡に類例が認められる。

SK01は、長さ2.16m、幅0.72mの長楕円形の土坑である。北側が若干深い。遺物は出土していない。SK02は、長さ2.84m、幅0.88mの長楕円形の土坑である。北側がわずかに深く、遺物は出土していない。SK01とSK02は、ともに平面長楕円形で、北側が深くなっており、地山のブロックを含む点で類似している。時期、性格ともにはっきりしないが、土壙墓の可能性があり、今後の周辺の調査においては注意する必要がある。

## (4) 出土遺物 (図6)

1～7は遺構検出面から出土した遺物である。1、4、5は須恵器坏身である。6は、須恵器甕である。3は、土師器坏である。これらの遺物は、残存状況は良好ではないが、7世紀後半から8世紀前半のものとして推定される。2、7は中世の施釉陶器である。

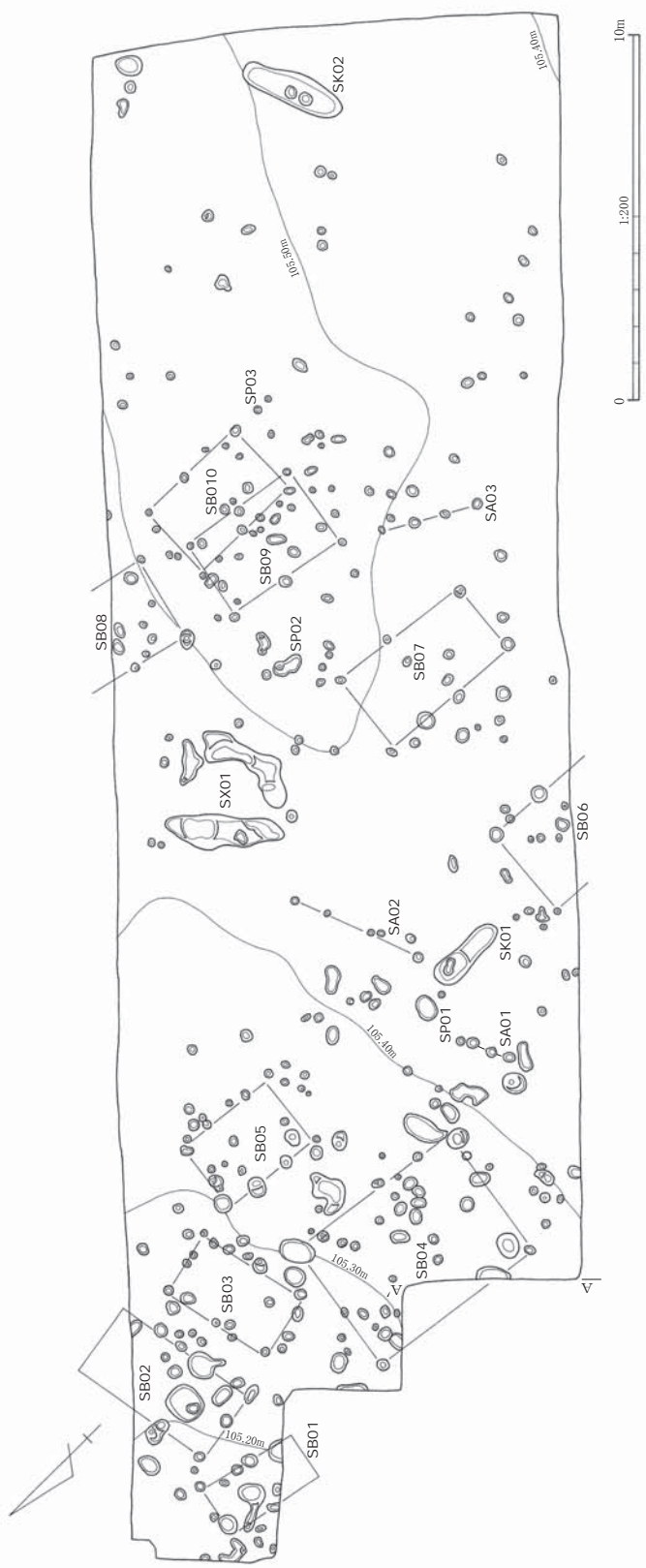
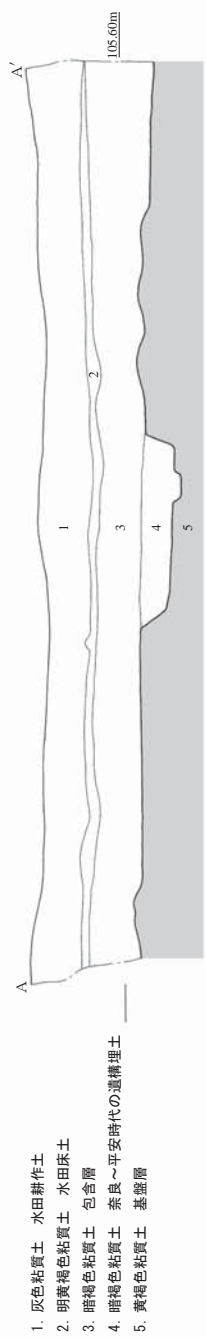


図3 調査区全体図・土層断面図

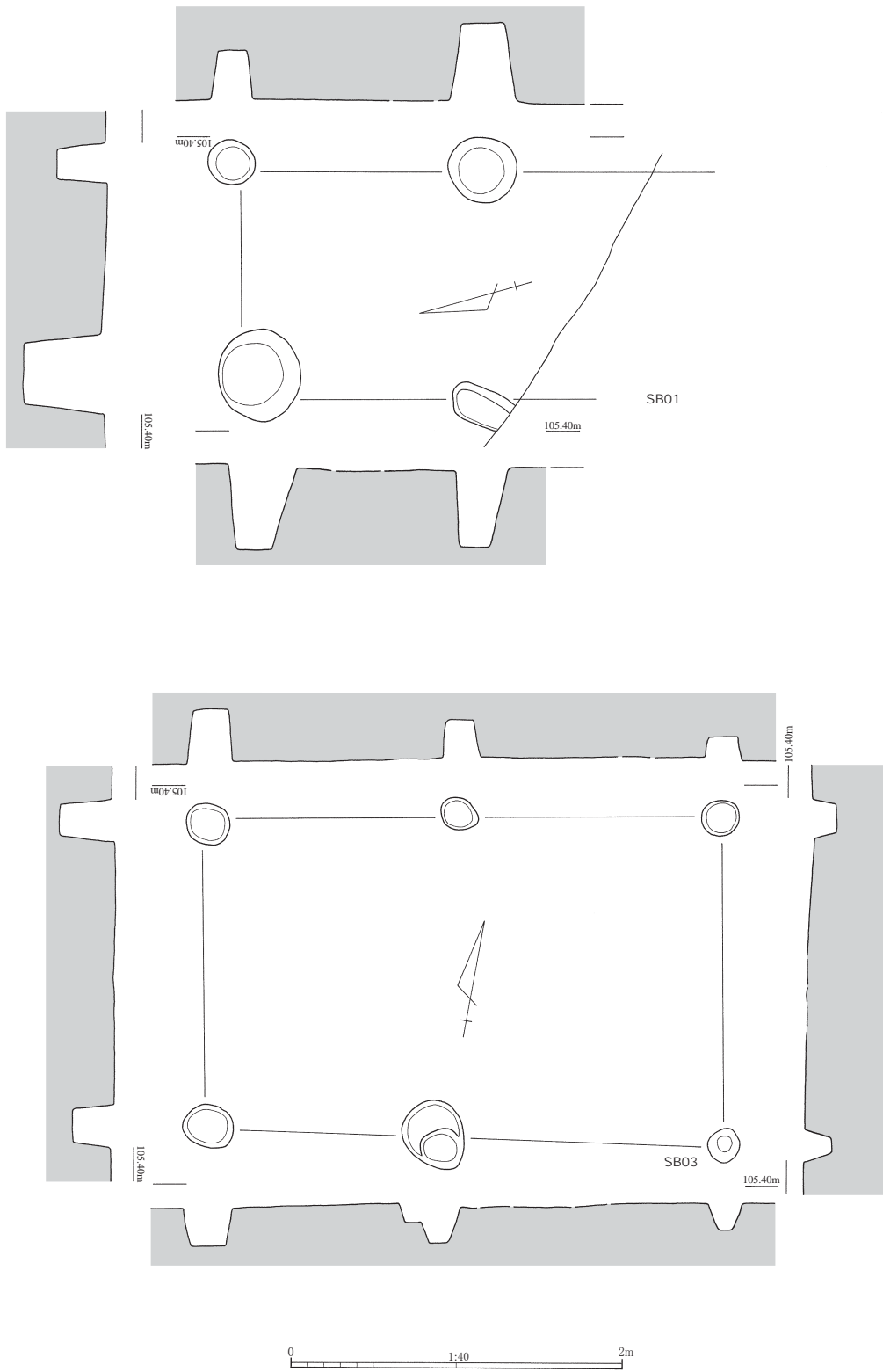


图4 SB01·03 掘立柱建物

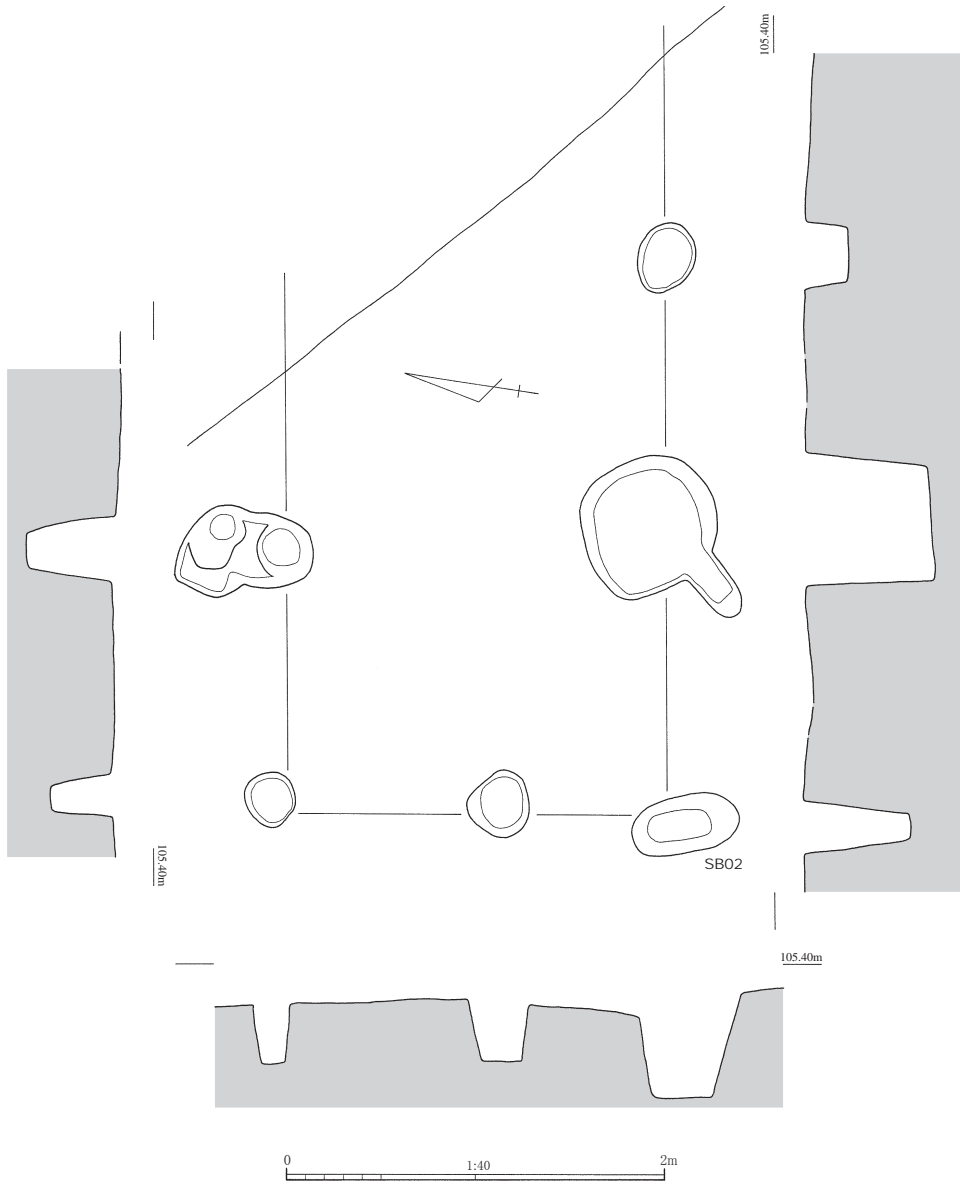


图5 SB02 掘立柱建物

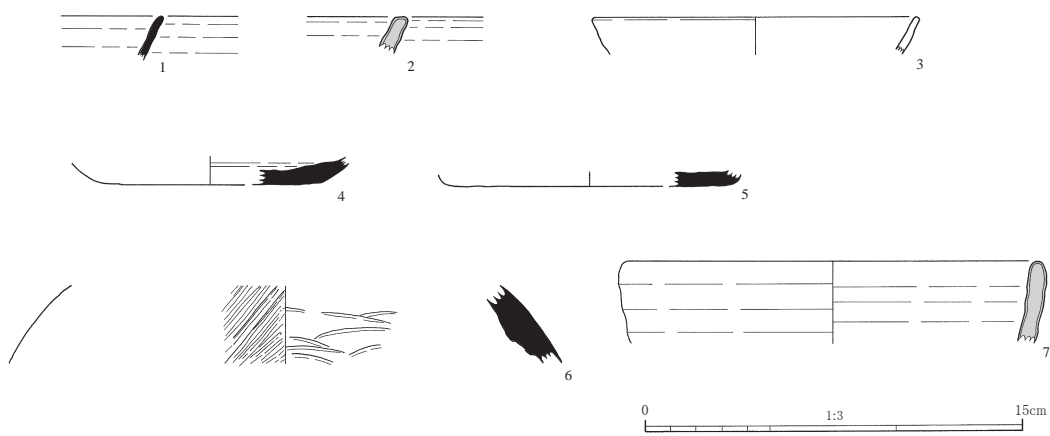


图6 出土遺物

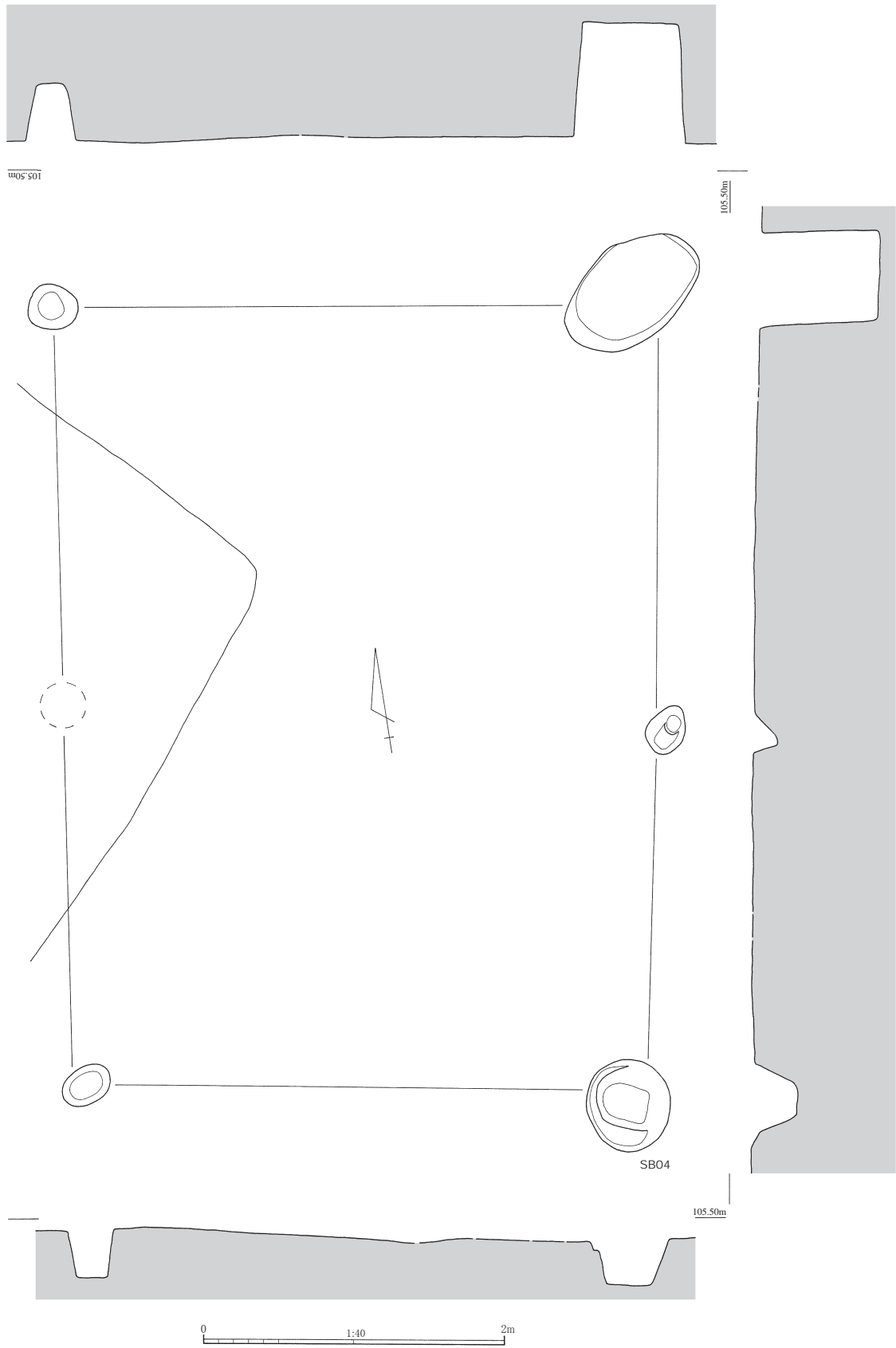


图7 SB04 掘立柱建物

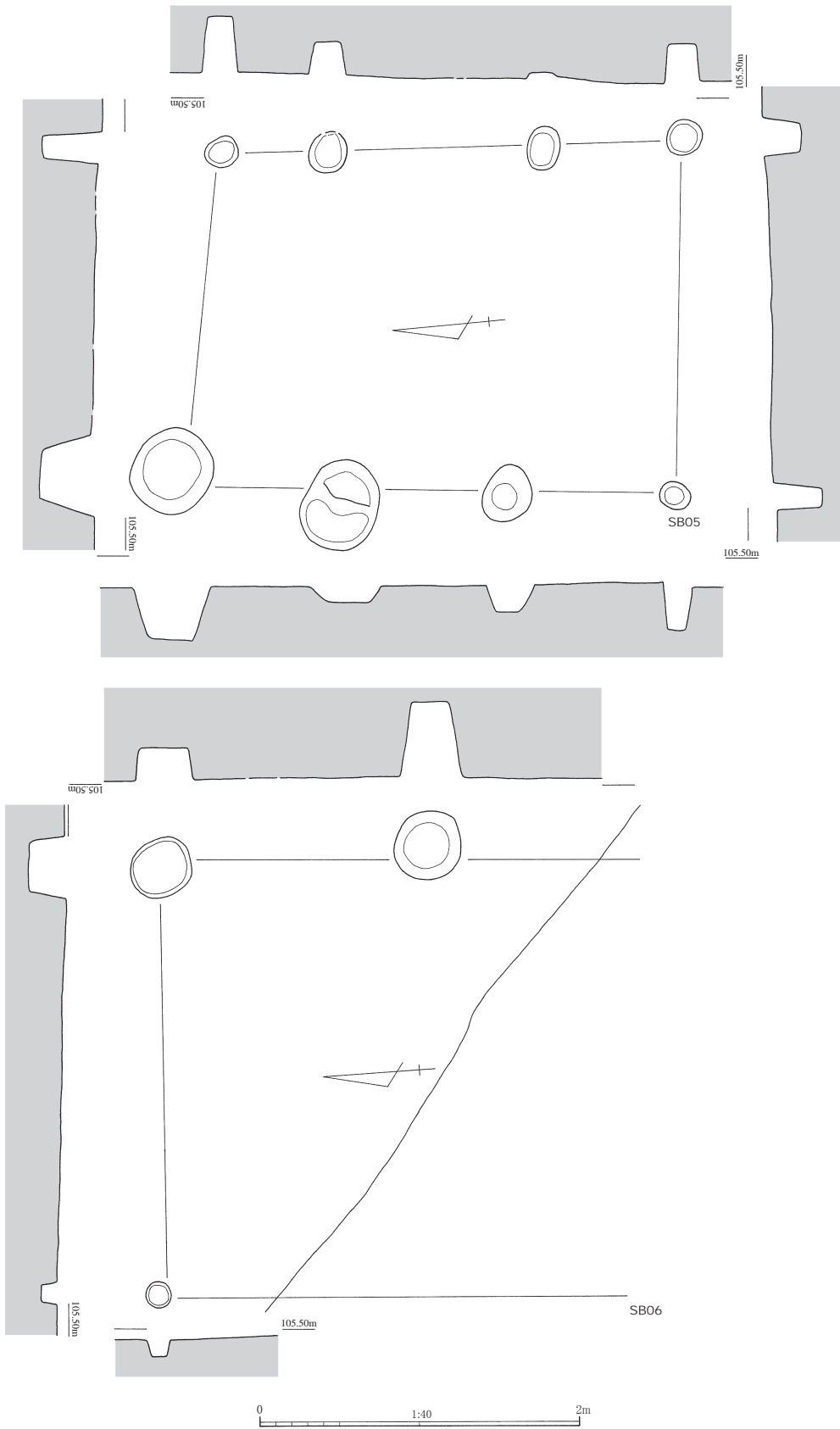


图8 SB05·06 掘立柱建物



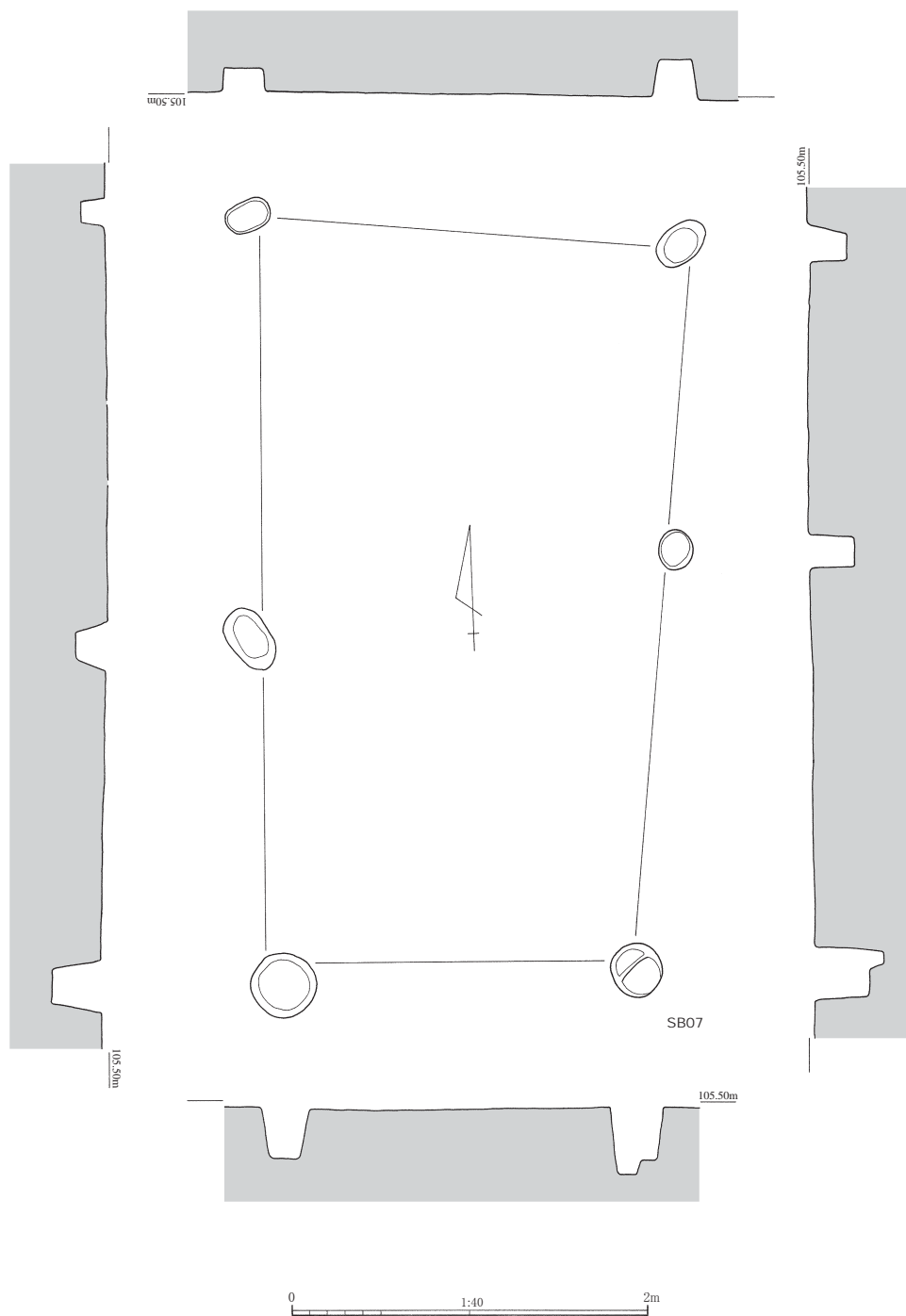


图9 SB07 掘立柱建物

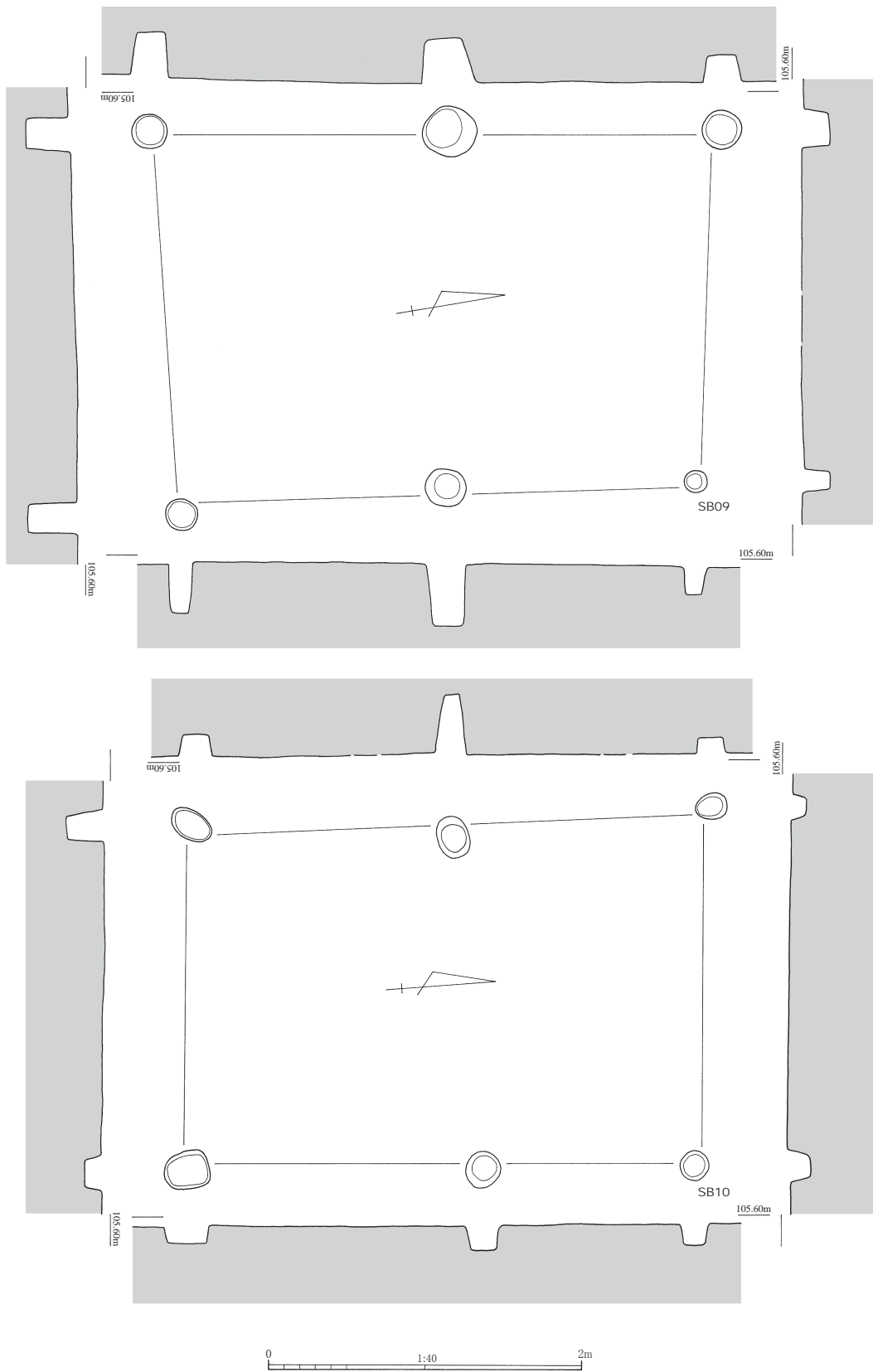


图 10 SB09·10 掘立柱建物

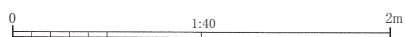
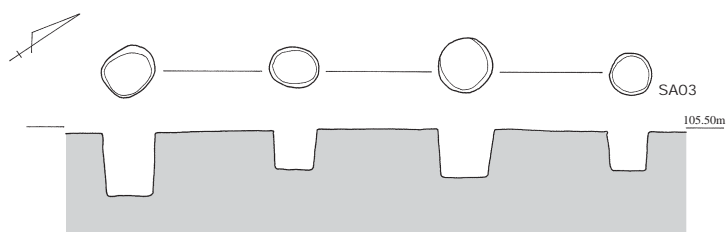
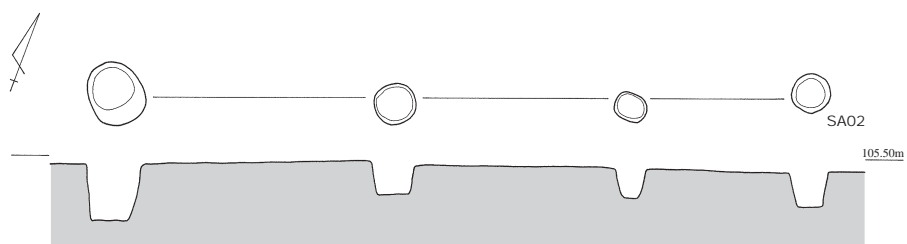
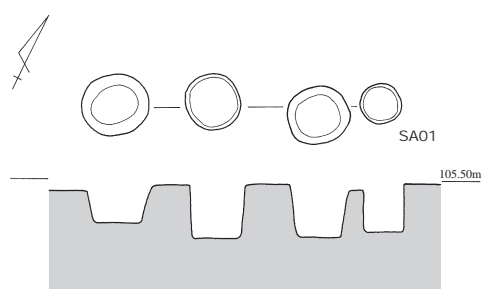
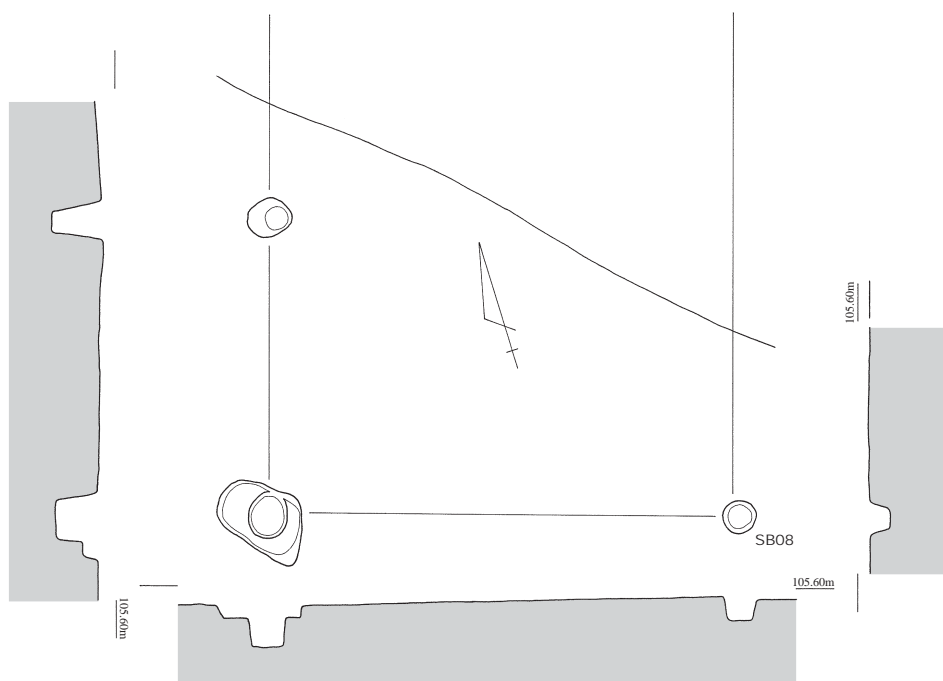


图 11 SB08 掘立柱建物、SA01·02·03 柵



## 第3章 まとめ

今回の調査では、奈良時代のものと推定される掘立柱建物10棟がまとまって検出された点が大きな調査成果である。建物の主軸は、ほぼ正南北のものが多く、比較的小規模なものである。また、SB01・02・03・04・05の掘立柱建物群とSB06・07・08・09・10の掘立柱建物群が、柵SA01・02を隔てて東西に位置している点に注目できる。それぞれが、建物群をなし、集落を構成する単位となっていたようである。建物の配置について、ある一定の方向性があったことをうかがわせる。また、出土遺物がきわめて少ない点も注意される。1次調査区の南側に位置する2次調査区においても掘立柱建物5棟、柵が検出されているが、遺物はわずかに出土している程度である。4次調査区の北側に位置する3次調査区においても、7世紀後半から8世紀前半の竪穴建物1軒と掘立柱建物2棟が検出されている。旧東山道に面する古代の集落の状況は少しずつ明らかになってきたが、掘立柱建物の性格については、今後の周辺部の調査のなかでさらに検討していく必要がある。また、藤丸遺跡周辺には、郡の下部単位である高宮郷が存在したとされるが、高宮郷との関係についても課題である。

東山道沿いに位置する藤丸遺跡の西方では高宮廃寺や丁田遺跡が、東方では八反切遺跡、土田遺跡、木曾遺跡が、北方には瓦と須恵器を焼成した窯跡の検出された鳥籠山遺跡が分布しており、周辺遺跡の様相や高宮廃寺を建立した有力氏族の動向もふまえ、藤丸遺跡の古代集落について考える必要があるだろう。

### 参考文献

- 滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 1997『木曾遺跡Ⅱ』
- 滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 2002『木曾遺跡・土田遺跡・月ノ木遺跡』
- 新高宮町史編纂委員会 2007『新高宮町史』 高宮学区連合自治会・高宮町公民館
- 多賀町教育委員会 1999『木曾遺跡(第2次～第7次調査)』多賀町埋蔵文化財発掘調査報告書第11集
- 高橋美久二 2007「律令国家と近江」『新修彦根市史 第1巻通史編古代・中世』彦根市
- 彦根市教育委員会 1992『鳥籠山遺跡発掘調査概要報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第23集
- 彦根市教育委員会 2005『藤丸遺跡Ⅱ』彦根市埋蔵文化財調査報告書第37集
- 彦根市教育委員会 2006『八反切遺跡』彦根市埋蔵文化財調査報告書第38集
- 彦根市教育委員会 2009『丁田遺跡Ⅰ』彦根市埋蔵文化財調査報告書第43集
- 彦根市教育委員会 2009『八反切遺跡Ⅱ』彦根市埋蔵文化財調査報告書第42集
- 彦根市教育委員会 2011『丁田遺跡Ⅱ』彦根市埋蔵文化財調査報告書第48集
- 彦根市教育委員会 2013『藤丸遺跡Ⅲ』彦根市埋蔵文化財調査報告書第53集

図版 1



1 調査区全景 西から



2 調査区全景 南東から



1 調査区全景 西から

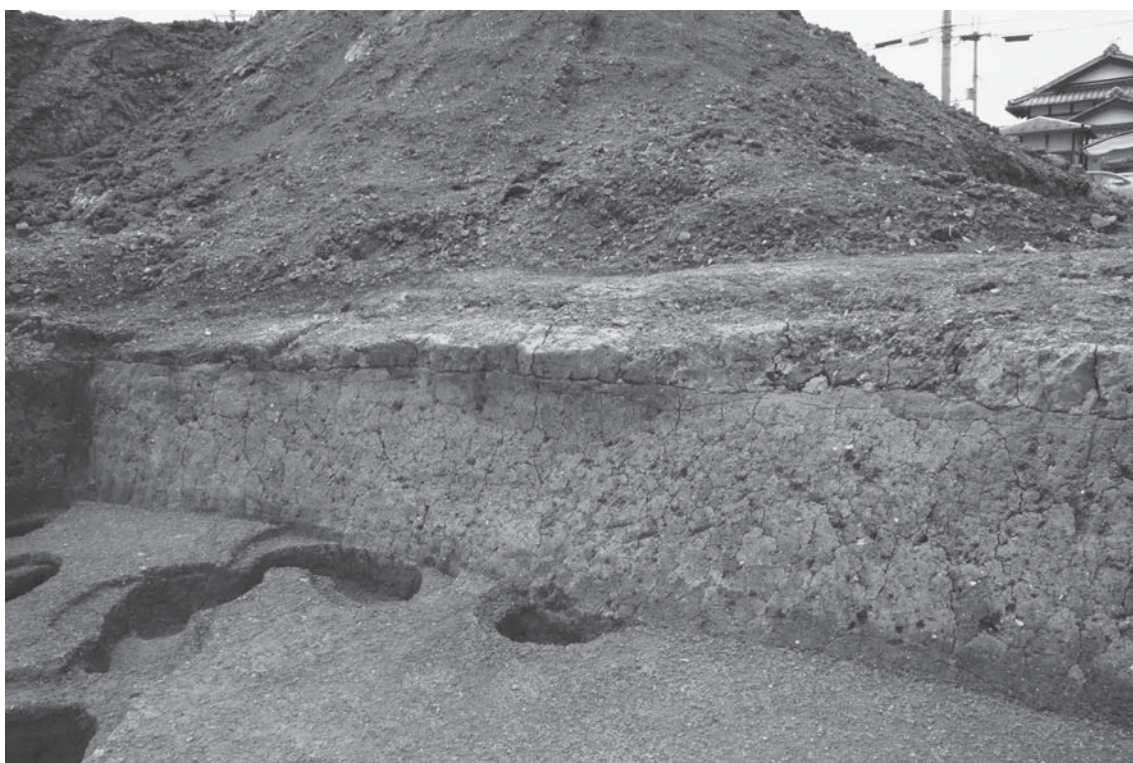


2 調査区全景 東から

図版3



1 調査区西壁土層断面 東から



2 調査区北壁土層断面 南から





1 調査風景



2 調査風景

図版 5



1 SB01 北から



2 SB02 西から



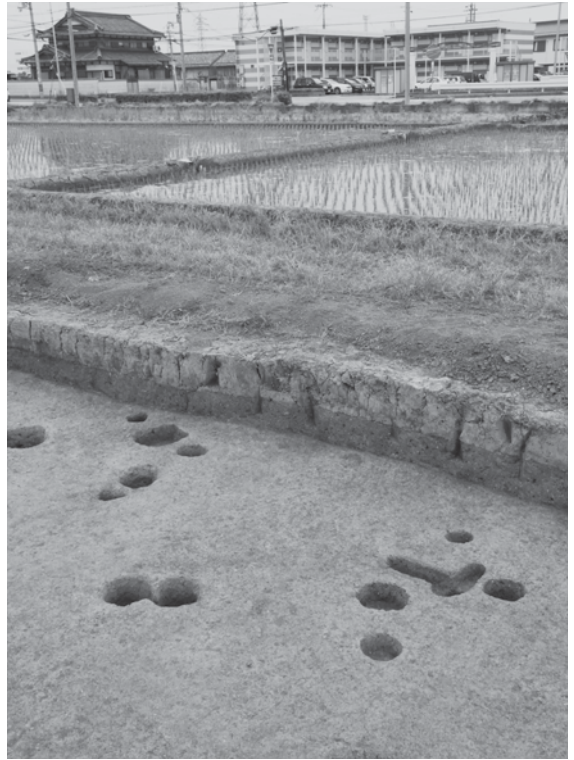
3 SB03 西から



4 SB04 南から



1 SB05 北から



2 SB06 北から



3 SB07 北から



4 SB08 南から

図版 7



1 SA02 西から



2 SA03 南から



3 SK01 南から



4 SK02 西から



1 SX01 北東から



2 SX01 南西から

# 報告書抄録

ふりがな	ふじまるいせき4							
書名	藤丸遺跡Ⅳ							
副書名	集合住宅建設工事に伴う発掘調査							
巻次								
シリーズ名	彦根市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	55							
編著者名	戸塚洋輔							
編集機関	彦根市教育委員会 文化財課							
所在地	〒522-0001 彦根市尾末町1番38号 TEL 0749-26-5833							
発行年月日	20140324							
ふりがな	ふりがな	コード		世界測地系		調査面積	調査期間	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号	北緯	東経			
ふじまるいせき 藤丸遺跡	ひこねし 彦根市 たかみやちょう 高宮町	25202	62	35度 14分 17秒	136度 15分 43秒	436㎡	20120425 ～ 20120622	集合住宅 建設工事
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
藤丸遺跡	集落	奈良時代		掘立柱建物 土坑		土師器 須恵器		

彦根市埋蔵文化財調査報告書第55集

## 藤丸遺跡Ⅳ

— 集合住宅建設工事に伴う発掘調査 —

平成26年（2014年）3月発行

編集・発行：彦根市教育委員会文化財課

彦根市尾末町1番38号

TEL 0749-26-5833

印刷・製本：近江印刷株式会社



# FUJIMARU SITE

March, 2014

Hikone Educational Bureau  
Cultural Asset Division